

その他

山田原欽「毛就直玉江別業記」訳注

鎌田 出*1

[はじめに]

「毛就直玉江別業記」は、『復軒文藁』（山口県文書館所蔵。以下、山田原欽の文は全て同書に拠る）に「貞享二年」の作として所収される。題下に「同年二月」とあるが、貞享2年は長州藩3代藩主毛利吉就が「萩八景」の題目を景色に充て、山田原欽、雲谷等璠、安部春貞にそれぞれ漢詩、八景図、和歌の作成を命じた年である。しかも「二月」は、毛利博物館に所蔵される「絹本淡彩八江萩八景図巻」の奥書に記された「仲春」であり、まさに「萩八景」誕生と同時期に作成された一文である。

前年9月に作られた「古畑別業記」は、当時の萩の名所旧蹟をほぼ網羅するが、「萩八景」の一つである「倉江（帰帆）」への言及はない。また、「毛就直玉江別業記」以前の詩文に「倉江」が見当たらないことからすれば、原欽は「毛就直玉江別業」作成時において、はじめて「倉江」の存在を知ったと考えられる。

[凡例]

- 一、訳注の構成は、①本文（ゴシック体）、②書き下し文、③語釈、④現代語訳の順とした。
- 二、原文は、原則として旧字体を用いたが、異体字等一部『復軒文藁』での表記を踏襲し、必要に応じて注記を加えた。また、誤字・誤用と思われるものは、訂正の上注記を加えた。
- 三、引用文についても、原則として旧字体を用いた。
- 四、書き下し文は、原文及び引用文ともに原則として常用漢字を用い、常用漢字の無い場合は旧字体を用いた。
- 五、書き下し文は、現代仮名遣いで統一した。また、ルビも現代仮名遣いとした。但し、和書及び絵図からの引用は原文表記をそのまま踏襲した。

六、固有の名称を除き、年数、巻数等はすべてアラビア数字による表記とした。

①本文

玉江之山水、長城之一致也。就中而佳者、予於鹽坪之山見之矣。乃毛利就直有別墅于茲。

②書き下し文

玉江の山水、長城の一致なり。中に就きて佳なる者、予塩坪の山に之を見たり。乃ち毛利就直茲に別墅を有す。

③語釈

「玉江」…現在の萩市大字山田玉江浦一帯。萩八景「玉江秋月」で知られる。山田原欽「八江八景」詩（山口県文書館所蔵『復軒詩藁』所収。以下、山田原欽の詩は全て同書に拠る）に、「玉江一片秋、明月入晴流（玉江一片の秋、明月晴流に入る）」とある。また、『長門金匱』（『長周叢書』所収）は、往古「八江八景」の一つ「鐘江秋月」が「玉江川尻」であるとす。

「長城」…長州城。萩城下町を言う。原欽「桂就定別墅記」（天和2年）に、「桂就定丈人之別墅在長州城外南山之側（桂就定丈人の別墅は長州城外南山の側に在り）」とある。

「乃」…意外感・驚きを表す副詞。

「鹽坪之山」…『地下上申絵図』（山口県文書館所蔵）に、現在の山陰本線と萩三隅線（県道64号）に挟まれたあたりに「鹽坪山」と記される。『慶安5年城下町絵図』（山口県文書館所蔵）に拠れば、当時の鹽坪山は、倉江の海に突き出ていた。国土地理院地図によれば、「鹽坪山」と思われる場

所の現在の海拔は約40メートルである。

「毛利就直」…毛利就直。「毛就直」も同じ。寛永13（1636）年～宝永6（1710）年。長州藩の一家老である吉敷毛利家の4代当主。

「別墅」…別邸。『地下上申絵図』に、「禪宗観音院（潮音山観音院）の裏手に「毛利元直拜衍」と記されている。「毛利元直」は毛利就直の子^{ひろかね}包の子で、吉敷毛利6代目当主。毛利就直の別邸はここにあったと思われる。

④現代語訳

玉江の景物は、萩城下の勝景の一つである。中でも素晴らしいものを、わたしは塩坪山に見た。毛利就直殿はなんとこの地に別邸を構えておられる。

①本文

始入其境也、岩崖聳而疎松多、山溜湛而飛泉寒。𦵏而有路、可通來往。轉而入則紫藤成門、蒼筠擁舍。竹筧洗耳、菴樹青眼。攀九折之間而行傾側之𦵏、則松翠滿衣、草露沾人。

②書き下し文

始めて其の境^{きょう}に入るや、岩崖^{がんがい}聳^{そび}えて疎^そ松^{しやう}多^{さん}く、山溜^{りゅう}は湛^たへ飛泉^{ひせん}は寒^ごゆ。𦵏^{ひる}くして路^ろ有り、通^といて來往^{らいわう}す可^べし。轉^{てん}じて入^いれば則^{すなは}ち紫藤^{しじやう}門^{もん}を成^{せい}し、蒼筠^{そうじん}舍^{しゃ}を擁^{よう}く。竹筧^{ちくせん}洗^{せん}耳^じ、菴樹^{あんじゆ}青眼^{せいがん}。九折^{きゅうせつ}の間^のを攀^{のぼ}り傾側^{けいせ}の𦵏^{のぼ}を行^いけば、則^{すなは}ち松翠^{しょうすい}は衣^いに満^みち、草露^{そうろう}は人^{ひと}を沾^しす。

③語釈

「疎松」…枝のまばらな松。「疎」は「疎」の異体字。
「山溜」…山から湧き出る泉。「溜」は、川の流れや水流。
「湛」…水が澄む（清湛）、また、満ち溢れる（湛溢）。
「飛泉」…泉の水しぶき。
「𦵏」…谷間が広々としている様を言う。

「來往」…「往来」に同じ。行ったり来たり。

「蒼筠」…青々とした竹。

「竹筧洗耳」…筧を流れる水で耳を洗う。「洗耳」は、堯帝から帝位を譲ると言われた許由が、その話を不快に思い潁水（河南省の嵩山南麓を流れる川）で耳を洗った故事（『高士伝』巻上「許由」）を踏まえる。

「菴樹青眼」…緑の樹木に青眼で対する。「菴」は「緑」に同じ。「青眼」は、竹林の七賢の一人阮籍が俗人には白眼で対応し、意に叶う人物には青眼で対応した故事（『蒙求』巻下「阮籍青眼」等）を踏まえる。前出の「洗耳」とともに、脱俗の境地を述べる。

「九折」…「九十九折」に同じで、幾重にも折れ曲がる様。

「𦵏」…長い道。張衡「西京賦」（『文選』巻2）に「𦵏杜蹊塞（𦵏杜り蹊塞る）」とあり、薛綜の注に「𦵏道也、蹊徑也（𦵏は道なり、蹊は徑なり）」とある。

④現代語訳

その場所に入るや、岩だらけの崖が聳え立ち枝のまばらな松が多く生え、泉は水を湛え水しぶきは寒々としていた。谷間は広々として道があり、往来できる。方向をかえて入ってゆくと紫色の藤の花が門をつくり、青々とした竹が建物を抱くように囲む。竹には潁水で耳を洗った隠者の許由のことが、緑の木々には青眼白眼を使い分けた竹林七賢の一人阮籍のことが思い起こされる。九十九折りの谷を登り傍らの長い道を進んで行くと、松の緑が衣を満ちし、草に降りた露が人を潤す。

①本文

間閑聽鶯語、透邏躡獸迹。一步而十顧、嘯者答吟者清漸而出。盡曼衍曲折之處、則平面爲一岡。此岡後負峯、頂有甕附之氣象。傍啓臥、麓有鼎足之體勢、

如箕尾、如盤龍、如月之方恒。當其良位者、指月山也。

②書き下し文

間関たる鶯語を聴き、透麗たる獸迹を躡む。一たび歩みて十たび顧るに、嘯く者吟に答うる者清らかに漸み出ず。曼衍曲折の処を尽くせば、則ち平面一岡を為す。此の岡後に峰を負い、頂に甕附の氣象有り。傍に啓臥し、麓に鼎足の体勢有り、箕尾の如く、盤龍の如く、月の方に恒するが如し。其の良位に当たる者、指月山なり。

③語釈

「間関」…穏やかな鳥の声。疊韻語。

「透麗」…くねくねと折れ曲がる様。疊韻語。

「躡」…踏む。

「嘯」…声を長く引いて詩歌を吟ずる。うそぶく。また、獸の声を言う。

「答吟」…「吟」に応答する。互いに歌声をかわすことを言う。

「曼衍」…極まりなく広がる様。「漫衍」に同じ。『楚辞』(遠遊)に「斑漫衍而方行(斑(=まだら模様)の馬)漫衍として方めて行く)」とある。

「甕附」…不詳。『春秋左氏伝』(襄公24年)に「附婁無松柏(附は婁 松柏無し=小さな丘にはしばしば松柏のような大きな木は生えない)」とあり、ツボの形をした小さな岡を言うか。

「氣象」…有様。様子。

「啓臥」…開け横たわる。

「鼎足」…「鼎」は、三足・両耳を持った器。以下の「箕尾」、「月之方恒」から、土地が東に向かって弓形(弦は東に当たる)に開けている様を言うか。

「箕尾」…二十八宿の「箕宿」と「尾宿」の二星。共に東方に位置する。

「盤龍」…とぐるを巻く龍。

「恒」…上弦の月が次第に満ちてゆくこと。『詩経』

(小雅・天保)に「如月之恒(月の恒するが如し=月が満ちてゆくようである)」とある。

「良」…うしとら。方位は東北。

「指月山」…萩の三角州から日本海に突き出た標高143メートルの山で、萩城の一角をなす。南麓には天守を備えた本丸が置かれ、山頂には詰丸が築かれていた。

④現代語訳

穏やかな鶯のさえずりを聞きながら、折れ曲がる獸道を往く。少し歩いては十回振り返ると、互いに交わす歌声が清らかに聞こえてくる。長々と続く曲がりくねった道が尽きると、平らな丘になっている。丘の後ろには峰があり、頂きは壺のような姿をしている。そばに横たわり、その麓は三本足の鼎のような形で、箕宿と尾宿のようであり、龍がとぐるを巻いているようであり、上弦の月のような弓形に東に向かって開けている。良の方角が、指月山だ。

①本文

金城履二州之都、米戸連五鼎。蓮沼落天、竹郭引舟、江水東南來。瀉而入乎北溟沙、觜界潮亂雪盡一江之閑鷗。帆影連波迷津多、萬里之商舶若夫夜有漁火、杳映乎寂寞之濱。月臨蒼靄、高浮汀渚之影。至若晴日當海、萬象咸覩大漠荒居出入外國之雲。

②書き下し文

金城は二州を履むの都にして、米戸は五鼎を連ぬ。蓮沼は天に落ち、竹郭は舟を引く。江水東南より来りて、瀉ぎて北溟に入る。沙觜は潮の乱るるに界し、雪は一江の閑鷗を尽くす。帆影波に連なり津に迷うこと多く、万里の商舶夫の夜に漁火有るが若く、杳として寂寞の浜に映ず。月は蒼靄に臨み、高く汀渚の影に浮かぶ。晴日海に当るが若きに至りては、万象咸く大漠荒居して外国の雲に出入する

を^み睹る。

③語釈

「金城」…堅固な城。原欽「古畑別業記」に「金城傑兮馳蒼岑於西北、固壯基於雲端（金城傑として蒼岑^{そうしん}を西北に馳せ、固壯は雲端に基づく）」とある。もともとは指月城を指すが、ここでは防長二州を統括する萩を言う。

「履」…地位に就く。萩が防長二州を治めていることを言う。

「米戸」…不詳。「よねと・よねど」と読む名字は近江が起源で、コメを扱う職業や地域に由来する。農家・農村を指すか。

「五鼎」…五種の肉味を盛った五つの鼎。転じて、富貴の食事。『孟子』（梁恵王下）に「前以三鼎、而後以五鼎與（前には三鼎を以てし、^{しか}而る後には五鼎を以てするか）」とある。

「蓮沼」…『長門金匱』に「今の田町通りより南東はみな沼にて蘆原の水溜りなり」とあり、萩城下は沼地が広がっていた。また、「貞享年間作成絵図」（萩博物館所蔵）には、萩城二の丸「南ノ門土橋」を抜けたところに巨大な「蓮池」を確認できる。

「江水」…阿武川の支流、橋本川。

「沙觜」…くちばしのように突き出た砂地。「貞享年間作成絵図」では、三の丸西南にある吉川内蔵助邸の西側にくちばし状の砂浜を確認できる。

「界」…境界を接する。

「盡」…覆い尽くす。ここでは鷗が見えなくなること。

「津」…船の渡し場。原欽「萩八景」詩「櫻江暮雪」に「雪滿櫻江更問津（雪は桜江に満ちて更に津を問う）」とある。

「杳」…遠くかすかな様。

「蒼靄」…青い靄。

「至若」…「至於」に同じで、場面の転換を表す。范仲淹「岳陽樓記」（『文章軌範』巻6等）に「至若春和景明（春和らぎ景明らかなる…が若きに

至りては）」。

「大漠」…広大な砂漠。ここでは海を言う。

「荒居」…荒れ果てた住まい。

「外國之雲」…外つ国の雲。長州以外の国を意識した表現。山田原欽「内藤家夫人命臣賦八景詩」の「海上帰帆」に、「高風急送孤帆影、遠目直穿^{ただ}外國雲（高風急ぎ送る孤帆の影、遠目すれば直^{うが}に穿つ外国の雲）」とある。

④現代語訳

萩は周防と長門の二州を治める都で、家々では豪華な食事が並ぶ。広がる蓮沼は空が地上に落ちてきたようで、竹囲いには舟が繋がれている。橋本川は東南から流れ来て、北の海に注ぎ入る。河口の嘴のように突き出た砂浜は波立つ海の境目にあり、雪は川面で羽を休める鷗たちを覆い尽くしている。舟は波と一体になって揺れ動きどこが渡し場なのかかわからず、遙か遠くから訪れた商船は夜の漁火のように、遠くかすかに人気のない浜辺に映り見える。月は青い靄^{もや}の辺り、^{みぎわ}汀の上に高く懸かる。晴れた日に海に出会えば、すべてが広大な海の荒波の中で外^{そと}つ国の雲間に入り出りするのを見る。

①本文

倉江漕^{さいぎ}豈として来往するは万浪之光。大島、志津島、千島、羽島、尾島、相島、鯖島等諸山、或重其峯巒、或別而相爲主賓、或隱而露嶺乎。壑中波光湧金静影染藍、悠然極目則浩渺之際。

②書き下し文

倉江漕^{さいぎ}豈として来往するは万浪の光。大島、志津島、千島、羽島、尾島、相島、鯖島等諸山、或^{あるい}は其の峰巒^{ほうらん}を重ね、或は別れて相主賓^{あい}を爲し、或は隠れて嶺^{あらかわ}を露にするか。壑中に波光は湧金、静影は染藍、悠然として極目すれば則ち浩渺^{きわ}の際なり。

③語釈

「倉江」…現在の萩市大字山田倉江に地名が残る。橋本川河口の辺り。拙論『山田原欽「萩八景」詩訳注』（『至誠館大学研究紀要』2019）また「山田原欽『古畑別業記』に見える萩八景の誕生」（『中國詩文論叢第39集』2020）参照。後に吉田松陰「倉江觀濤記（倉江に濤を觀るの記）」（岩波版『吉田松陰全集』巻1所収「未忍焚稿」）に、あたりの景色が「古」とはすっかり変わってしまったとする船頭の話を書ける。

「濯滄」…霜雪の積もる様。『楚辭補注』（九思「憫上」）に「霜雪兮濯滄」とあり、洪興祖の注に「霜雪積聚貌（霜雪は積聚の貌）」とある。『復軒文集』は「さんずい+嵬」に作るが、「嵬」を同音の「嵬」に表記したものと思われる。なお、漢字表記の関係でここでは「さんずい+嵬」を通用する「滄」で代用する。

「大島、志津島、千島、羽島、尾島、相島、鯖島」…萩沖の七つの島。現在の「大島」「櫃島」「肥島」「羽島」「尾島」「相島」「鯖島」。「志津島」は「櫃島」の訛音表記、「千島」は「干島（肥島）」の誤記。「古畑別業記」は、「志津島」を「櫃島」、「千（干）島」を「日島」に作る。

「或～或～或」…事例を列挙する構文。ある場合は、～またある場合は～。

「峯巒」…連なる山々。杜甫「放船」（『全唐詩』巻30）に「青惜峯巒過、黃知橘柚來（青には峰巒の過ぐるを惜しみ、黄には橘柚の來たるを知る）」とある。七つの島々を連なる山々に見立てる。なお、実際の萩沖の島々は全て台地状で海に浮かんでいる。

「相爲主賓」…七つの島には大小があり、それを主と客人に見立てた表現。

「隱而露嶺」…眺める方向によって、島々が重なって見える様を言う。

「乎」…ここでは賛美を述べる詠嘆表現。

「壑中」…「壑」は大きな坑・溝。島々の浮かぶ海を言う。

「波光湧金静影染藍」…ほとぼしる金色の波と藍色に染まる島々。

「悠然」…遙かな様。

「浩渺之際」…日本海の水平線。「浩渺」は、果てしなく広がる様。「際」は、その尽きる辺りを言う。

④現代語訳

倉江では雪景色の中に無数の波が輝きながら往来する。大島、志津島、干島、羽島、尾島、相島、鯖島の島々は、連なる峰々が重なりあい、それぞれ分かれて主人と客人となり、峰の頂が隠れたり現れたりしている。海の中に波は金色にほとぼしり島々は藍色に染まり、はるか遠くを眼の届く限り眺めれば、果てしなく広がる水平線である。

①本文

遠出見島、腰濱之平坡不絶如綫、奈古之蒼嶺鬱而如武夫之擁戈矛也。近俯則樹圍深茂、百鳥聒喧、山花林芳郁々而明盛矣。又如春雨平灑、連朝霏霏、岩徑滑而藥草肥。石膚觸而雲氣蒸東自霧口之上流噓山嵐、淡濃之氣吞江而平來。螢火峯之團團、上野山之錯雜、以至唐人山之翠微。

②書き下し文

遠く出づる見島、腰浜の平坡は絶えずして線の如く、奈古の蒼嶺は鬱として武夫の戈矛を擁するが如きなり。近く俯せば則ち樹圍深茂、百鳥聒喧、山花林芳郁々として明盛たり。又如し春雨平らかに灑ぎ、連朝霏霏たれば、岩徑滑らかにして薬草肥ゆ。石膚触れて雲気は東のかた霧口のの上流より蒸りて山嵐を嘘き、淡濃の気は江を呑みて平らかに來たる。螢火峰の团团、上野山の錯雜、以て唐人山の翠微に至る。

③語釈

「遠出」…遠方にある、または見えること。

「見島」…萩沖約46キロの日本海に浮かぶ島。原欽「古畑別業記」に「海上諸山如見島之煙色（海上の諸山見島の煙色の如し）」とある。

「腰浜」…現在の萩市大字椿東越ヶ浜。貞享元年（1684）に三代藩主毛利吉就のお国入りに従い萩に入った山田原欽は、同年7月朔日、吉就公の越浜（腰浜）出游に同行し、吉就公の命により「遊越濱記」を記している。その「遊越濱記」に「山足平而爲白沙之堆者、腰浜也（山足平らかにして白沙の堆を爲す者、腰浜なり）」とある。

「平坡」…平地。「坡」は、平原。前注「遊越濱記」の「白沙」を言う。「古畑別業記」にも「腰濱之砂、亦茫而溥矣（腰浜の砂、亦た茫として溥し）」とある。

「奈古之蒼嶺」…笠山の青々とした峰。「奈古」は地名の「奈古屋」で、『防長地下上申』（マツノ書店1980）の「川島庄 越ヶ濱浦由緒書」に「往古奈古屋何某笠山ニ居城有之（往古の奈古屋何某笠山ニ居城する之れ有り）」と地名の由来を説明する。「遊越濱記」に「勢森鬱而挺起（勢森鬱として挺起す）」とある。なお、「遊越濱記」は「奈古」を「名護」に作る。

「戈矛」…「戈」も「矛」も武器のほこを言う。

「聒喧」…かまびすしい。「聒」も「喧」も、ともに鳴き声のやかましい様を言う。

「郁々」…香気の漂う様。『楚辞』（九章「思美人」）に「紛郁郁其遠承兮（紛郁郁として其れ遠承す）」とある。

「霏霏」…雨が降りしきる様。

「石膚觸」…『春秋公羊伝』（僖公31年）の「觸石而出膚寸而合（石に触れて出で膚寸（＝わずかな長さ）にして合す）」を踏まえる。雲は山の石に触れて発生し、切れ切れの雲が集まり雨を降らせ

ることを言う。『論衡』（巻11「説日」）に詳しい。

「霧口之上流」…「霧口」は、現在の萩市椿大字霧口。

そこから阿武川を遡った辺りを言う。「古畑別業記」に、「霧口之里、秋雜沆瀣之氣（霧口の里、秋沆瀣（＝朝霧）の気を雜う）」とある。

「山嵐」…蒸し昇る山の気。晴嵐。霧口から阿武川をやや下った龍藏寺の辺りは、「萩八景」の「上津江晴嵐」で知られる。前に引く「古畑別業記」は、続けて「龍藏之上、雲蒸氣洪（龍藏の上、雲は蒸たり気は洪たり）」と記す。

「呑江」…晴嵐が阿武川を飲み込むように包んでいる様。

「螢火峯」…螢火山。霧口より阿武川を遡った所であり、毛利就直の別業があった。「地下上申附図」（山口県文書館所蔵）の椿西分に、「毛利市正」（「市正」は就直の通称）の所領地が描かれ、それに接して「螢火山」が描かれる。原欽貞享3年8月18日作の「毛就直螢火山別業記」に「蓋夏月螢之出於源上而到此夷留者、因此取山名也（蓋し夏月螢の源上より出でて此に到り夷留する者、此れに因りて山名を取るなり）」とある。

「上野」…現在の萩市大字椿東上野。松本川に沿って幾つもの峰が並ぶ。「古畑別業記」に、「長城之東南皆有山焉。而傑出其間者独上野也（長城の東南皆山有り。而して其の間に傑出するは独り上野なり）」とある。

「唐人山」…萩市と阿武郡福栄村との境にある、標高474メートルの山。陶工の李勺光・李敬兄弟が松本村中ノ倉（萩市大字椿東中ノ倉）に御用焼物所を開窯した際に、薪山として拝領した。

「翠微」…霧の中に青々と見える山。

④現代語訳

遠くに見える見島、越ヶ浜の砂浜は糸のように長々と続き、奈古の青々とした山は鬱蒼として武人たちがほこを構えているかのようだ。近くを見下ろ

せば樹木や作物が深く生い茂り、様々な鳥たちがにぎやかにさえずり、山花と林の香が盛んに漂っている。また、もしも春の雨が穏やかに降り注ぎ、毎朝降り続くならば、岩だらけの小径は滑らかになり薬草も育つだろう。石に触れて生まれた雲の気は阿武川の上流東の霧口の辺りから立ち昇り晴嵐となり、濃淡混じるその気は阿武川を包み込んで広がりやって来る。蛍火山を取り囲み、上野の山々に交じり込み、そして青々とした唐人山にたどり着く。

①本文

烟花寂寥舊城山之遺址、陰雲黯淡鶴江之暝色、浩而未収。長橋之雄霓、忽焉疑雨之未截也。顧而南望、靈椿之山色近排櫻峯之外、補陀之高樓、遠出日輪之山。

②書き下し文

烟花寂寥^{せきりょう}たり旧城山^{きゅうじょうざん}の遺址、陰雲黯淡^{あんたん}たり鶴江^{つるがえ}の暝色^{ひろ}、浩^{ひろ}がりて未だ収まらず。長橋^{ながはし}の雄霓^{ゆうげい}、忽焉^{こつえん}として雨の未だ截^{はば}まざるを疑うなり。顧みて南望するに、靈椿^{れいちん}の山色は近く桜峰^{おうぼう}の外に排^{つら}なり、補陀^{ふだ}の高樓は遠く日輪^{にりん}の山に出ず。

③語釈

「烟花」…春がすみ。また、靄^{もや}にかすむ春の花。李白「黄鶴樓送孟浩然之廣陵（黄鶴樓にて孟浩然の広陵^{くわんりやう}に之^{これ}くを送る）」（『全唐詩』巻 174）に「烟花三月下揚州（烟花三月揚州に下る）」とある。

「烟」は「煙」の異体字。

「寂寥」…静かで物寂しい様。

「舊城山之遺址」…松本川右岸の無田ヶ原にある「城の腰山」（標高 144 メートル）に残る古城跡。鎌倉時代、元寇に備え長門北浦に築かれた城砦の一つ。尼子氏が築城し、侍大将松倉伊賀守が城主となったと伝えられる。その後、毛利氏支配となり、家臣の吉見氏が治めた。

「黯淡」…薄暗い様。

「鶴江」…現在の萩市大字椿東鶴江。原欽「萩八景」詩の「鶴江夕照」に「斜陽宜曬網、一半鶴江紅（斜陽網を曬^{さら}すに宜しく、一半鶴江紅なり）」とある。『長門金匱』に載せる往古萩八景「兼江夕照」の地。西側が日本海に面していたことから、「落照」（夕焼け）の名勝地となった。

「暝色」…日暮れの景色。

「長橋」…橋本川に橋本町と椿町の間にかかる橋本橋。城下町図では単に「大橋」と記される。木梨恒充『八江萩名所圖畫』（明治 25 年）巻 4 に載せる「橋本大橋」図に引かれた山根南溟の詩に「瀨岸長橋起、南通金谷村（瀨岸長橋起こり、南のかた金谷村に通ず）」とある。

「雄霓」…虹。その形状から、橋本大橋にたとえる。通常は色調が鮮明なものを「虹」「雄虹」と呼び、色調が暗いものを「霓」「雌虹」と呼ぶ。

「靈椿」…大照院の山号、靈椿山。ここでは大照院を麓に抱く有明ヶ山、嶽観音（ともに山口県文書館収蔵『御国廻御行程記』に拠る）を指す。玉江から見て、大照院は桜山の先に見える。なお、『萩古實未定之覺』（『長周叢書』所収）には「大照院様の山を御影山と云」とある。

「櫻峯」…現在の面影山（佛山）。原欽萩入り以前の延宝 8 年（1680）作「歡心亭記」は「櫻江山」、「古畑別業記」は「櫻山」と記す。「慶安五年萩城下町古地図」（山口県文書館所蔵）は「櫻ノ丸山」、『萩古實未定之覺』は「櫻江山」とするが、山本勉弥『萩附近の史實』（萩文化協會 1951）所収の「拾穂録」に拠れば、弘化年間頃より「面影山（佛山）」が用いられるようになったとする。

「補陀」…観音信仰の靈場である補陀落山。ここでは次項の「日輪之山」を言う。

「日輪之山」…天台宗南明寺の山号。日輪山。南明寺は行基の開基と伝えられ、毛利輝元により中興された。萩市椿の阿武川南岸、焼下山山腹にある。

本尊は聖観音菩薩。

④現代語訳

春霞はるがすみが物寂しく漂う城の腰山の古城跡、空一面に薄暗い雲の立ち込める日暮れの鶴江、広がる霧もぎと雲はまだ取まらない。橋本川にかかる大橋の虹のような姿に、はっきりとはしないが、まだ雨が眺望を阻んでいないのだろう。振り向いて南を眺めやると、壺椿山の景色は桜山の先に連なり、観音堂の高楼が遥か彼方の南明寺の山に見える。

①本文

此谷也、曾經老卒所棲、其壽蓋超百歳。可謂壽福之地也。予聞、樂山者壽。夫惟壽是以不朽。此亭就宣官暇所憩息、使余壽其勝概于斯文云。

②書き下し文

此の谷や、曾經老卒の棲む所、其の壽蓋し百歳を超ゆ。壽福の地と謂う可きなり。予聞く、山を楽しむ者は「壽」と。夫れ惟みるに壽は是の以に朽ちず。此の亭は就宣官暇に憩息する所、余をして其の勝概を斯の文に壽がしめて云う。

③語釈

「就宣」…榎本なりのぶ就宣。毛利輝元・秀就に仕えた榎本伊豆守元吉の三男。毛利秀就・綱人に仕えた榎本遠江なるとき就時の弟。

「樂山者壽」…毛利就直の徳と長寿を祝う讃辞。『論語』（雍也）に「仁者樂山（中略）仁者壽（仁者は山を楽しむ（中略）仁者は「壽」し）」とあるのを踏まえる。「古畑別業記」に、「君之仁智與夫名山勝水、同爲不朽（君の仁智と夫の名山勝水と、同に朽ちずと為す）」とある。

「官暇」…公暇。

「勝概」…優れた境地。眺め。

「斯文」…この文。「毛就直玉江別業記」を言う。

④現代語訳

この谷は、かつて年老いた役人が住んでいたところで、その齡は百を超えていたようだ。長寿と幸福の地であると言える。わたしは聞いている、山を楽しむ者は仁者であり長寿であると。そもそも思うに齡はこのために永遠となるのである。この四阿あずまやは榎本就宣殿が公暇の折に休息される場所であり、わたくしにその景勝を「毛就直玉江別業記」に言祝がせなされたのである。